

厚生労働科学研究費補助金（がん対策推進総合研究事業）

小児がん拠点病院等の連携による移行期を含めた小児がん医療提供体制整備に関する研究  
分担研究報告書

## 「小児がん拠点病院による小児がん医療提供体制の検討」

研究分担者 後藤 裕明

神奈川県立こども医療センター血液 腫瘍科 部長

### 研究要旨

神奈川県立こども医療センターにおける小児がん拠点病院としての整備状況を、直接的ながん治療（集学的治療の提供、小児がん早期相試験の実施）、長期フォローアップ、地域連携、相談支援、緩和ケア、AYA 世代がん患者への取り組み、小児がんに関わる医療従事者の教育、に分けて考察した。小児がん拠点病院指定後、小児がんに関わる多職種連携、長期フォローアップに関する体制整備が進んだが、これらの進歩を他の連携施設と共有するシステムづくりが今後の課題と考えられた。

#### A. 研究目的

2012年に小児がん拠点病院制度が制定され、神奈川県立こども医療センターは関東甲信越地区の拠点病院として、小児がん医療提供体制の充実に努めてきた。本研究の目的は、小児がん拠点病院指定要件に示された拠点病院としての役割、さらには、小児がん拠点病院連携協議会や地区の小児がん医療提供体制協議会において提言された拠点病院の役割を参照し、神奈川県立こども医療センターの地域における小児がん拠点病院としての取り組みを評価することである。

#### B. 研究方法

神奈川県立こども医療センターは、小児がん診療に関わる複数の部門・部

署を有機的に統括し、診療への取り組みを効果的に推進することを目的として、2015年に小児がんセンターを設置した。平成31年度（令和元年度）における小児がんセンターの活動実績を集学的治療の提供、小児がん早期相試験の実施、長期フォローアップ、地域連携、患者・家族に対する相談支援、緩和ケア、AYA 世代患者への支援、医療従事者に対する教育と研修、の項目ごとに評価した。

#### C. 研究結果

集学的治療の提供

神奈川県立こども医療センターにおいて平成31年（令和元年）1月～12月に、新たに治療を開始した小児がん患者の総数は、74件であった。再

発・難治であることなどを理由に治療途中で当センターに転院となった症例は24件であり、前年度同様、集学的治療を要する固形がん症例、難治例が集約されている傾向が続いた。原則としてすべての新規治療開始、あるいは外科治療が行われた症例を対象にTumor Boardが行われた。Tumor Boardには血液・腫瘍科医師、担当外科医師（小児外科、脳神経外科、整形外科、泌尿器科、形成外科、皮膚科）、放射線科医師・技師、病理科医師、小児がん相談員、緩和ケアサポートチーム医師・看護師が参加した。

今年度より、すべての新規入院患者に対して、入院初期に多職種（医師、看護師、学校教員、保育士、薬剤師、臨床心理士、栄養管理士、理学療法士）によるカンファランスを開催し、治療だけでなく、療育や社会支援に関する情報共有を行う体制が整備された。小児がん栄養プロジェクトチームによるカンファランス、リハビリテーション科と血液・腫瘍科による合同カンファランスは今年度も毎月開催された。栄養と口腔ケアを主題とした患者・家族との座談会である栄養サロンは年に3回開催した。

#### 小児がん早期相試験の実施

神奈川県立こども医療センター治療管理室の協力のもと、小児がんを対象とした企業治験（4件）、医師主導治験（1件）に参加し、他院からの紹介患者も受けながら、症例組み入れに協力した。

#### 長期フォローアップ体制の整備

神奈川県立こども医療センターにおける長期フォローアップ外来は、一般外来とは別に、患者ごとのフォローアップ計画策定と患者教育・自立支援を目的として行われ、原則として治療終了後2年経過した患者が10、15、18歳に達した時期を目安に行われている。平成29年から開始され、平成31年度までに計50名以上の小児がん経験者が受診した。

#### 地域連携

地域における小児がん診療施設との連携を充実させるために、横浜市小児がん診療連携病院協議会が開催され、小児がん診療に関する情報交換を行った。

#### 相談支援

小児看護専門看護師が専従の小児がん相談支援室相談員として前年度までと同様に活動し、小児がん患者および家族への支援にあたっている。小児がん相談支援室ではホームページを開設しており

（<http://kcmc.jp/shounigansoudan/>）、このホームページを介した相談もあった。

#### 緩和ケア

緩和ケアサポートチームは新規入院カンファランス、毎週の病棟カンファランス、Tumor Boardに参加し、すべての小児がん入院患者の状況を緩和ケアサポートチームが把握する体制が整備された。

AYA世代がん患者への取り組みTeen's Roomの活用、また思春期世代患者を対象としたイベント（花火大

会、映画鑑賞会など)を開催し、こども専門施設の中で少数派である思春期世代患者が、集い語り合うことができる場を提供した。

#### 医療従事者研修

小児がん医療従事者の研修を目的として、小児がんセンターとして下記の研修会等を企画、開催した。

- ・小児がんセミナー(院内を中心とした診療従事者、2回)
- ・小児緩和セミナー(院内外の診療従事者、5回)
- ・小児がん看護研修(関東甲信越ブロック小児がん診療施設、2回)
- ・小児がん相談支援セミナー(小児がん支援者、1回)

#### その他

小児がん経験者とその家族、または一般市民を対象として、下記の研修会を開催した。

- ・血液・腫瘍科家族教室(院内患者、家族、2回)
- ・小児がん栄養サロン(院内患者、家族、3回)
- ・小児がん経験者の会(院内外の小児がん経験者、1回)
- ・小児がん家族サロン(院内の小児がん患者家族、4回)
- ・小児がん健康教育プログラム(院内の小児がん患者、その家族、2回)
- ・小児がん啓発イベント(一般市民、1回)
- ・小児がんセンターだよりの医療機関への配布(3回)

#### D. 考察

小児がん拠点病院制度が発足して以

来、集学的治療を要する固形がん症例や、造血器腫瘍患者でも造血細胞移植を必要とする症例が治療途中で他施設から紹介されることが増加しており、難治症例に対する集学的治療が可能なマンパワーを持つ小児がん診療拠点として、神奈川県立こども医療センターは期待される役割をある程度、果たすようになったと考えられる。小児がん患者に対する多職種連携、長期フォローアップ体制の整備など、小児がん診療を行う施設として必要な施設内整備も進められてきた。

課題としては、移行期医療を含めた地域連携の充実化があげられる。特に長期フォローアップ、相談支援については、自施設以外で診療している患者・家族に対しても提供できることが望まれるが、一部のインターネット等を介した相談支援以外には実績がなかった。今後は、地域全体の小児がん医療・支援の向上を目指し、地域の施設との連携を強化する必要がある。

#### E. 結論

小児がん拠点病院として、診療、相談支援の点で機能整備がすすめられてきた。平成31年度(令和元年度)には新たに小児がん連携病院の制度が発足し、今後は拠点病院と地域の連携病院との具体的な連携の在り方を検討し、実践することが必要である。

#### F.健康危険情報

特になし。

**G. 研究発表**

特になし。

**1. 論文発表**

特になし。

**2. 学会発表**

特になし。

**H. 知的財産権の出願・登録状況(予定を**

含む)

**1. 特許取得**

該当事項なし。

**2. 実用新案登録**

該当事項なし。

**3. その他.**